

抽象と概念形成の哲学史

古代から現代へ

オーガナイザー: 池田真治(富山大学)

提題者: 酒井健太郎(環太平洋大学)

アダム・タカハシ(東洋大学)

五十嵐涼介(首都大学東京)、浅野将秀(首都大学東京)

Jimmy Aames(大阪大学)

本 WS では、主に哲学史研究の観点から「抽象」(abstraction)の問題に焦点を当てる。抽象とは、暫定的に定義すれば、心的表象のエッセンスを取り出し、「概念」(concepts)を形成するわれわれの心(意識や知覚・思考)の働きの一つである。このように見るならば、抽象は広義には「概念形成」という心的過程の一種として捉えることができる。

近年、その「概念」が、多様な分野をつなぐ一つのキーワードとして注目を集めている。これまで心というブラックボックスの中にあっただけで多義的に語られてきた「概念」という対象について、哲学とは異なる科学的アプローチが確立され、新たな形で論じられるようになったからである。とりわけ、近年の人工知能研究の寄与は大きい。たとえば、ディープ・ラーニングの手法が実践的レベルへと高められたことで、「概念」を学習するという人間の高度な抽象化の能力を、どのように機械に実装するかが盛んに研究されるようになった。「概念」とはそもそも何か、それはいかにして形成されるのかという「概念」の本性と起源をめぐる議論は、このような関連する科学の進展によって、今や新たな局面を迎えていると言えよう。

他方で、哲学史の観点から見れば、抽象や概念の問題は、古代ギリシア哲学以来の中心的主題の一つである。この同じ問題が、古代ではアイデアや表象と実体の関係をめぐる論争として、中世では抽象的概念の実在性をめぐる「普遍論争」として、そして近世では「観念」をめぐる議論として、様々なかたちで論じられてきた。さらに、「抽象的对象」は、現代形而上学的主要問題である。数学における抽象あるいは概念形成は、新フレイグ主義を中心に数学の哲学で議論されているし、またフランス・エピステモロジーの系譜においても議論されている。また近年、「概念工学」という学際的アプローチが登場し、新たな分野として注目され始めた。このように抽象や概念は、過去のみならず現在においてもなお哲学の中心問題であり続けている。

では、抽象や概念形成の問題に対して、哲学史の側からどのような貢献ができるだろうか。これらの問題については、古代から現代まで、様々な哲学者によって各々独自に語られてきた。その結果、それらが意味するところがあいまいになった否定的側面があることは否めない。しかし、それぞれの時代や地域において、哲学者たちが独創的な考えを提出してきたという肯定的側面も見逃せない。過去の議論を省みずして、現代における論争についても十分な理解も得られないはずである。

そこで、本 WS では、主に哲学史研究の観点から、「抽象」ないし「概念形成」とは何かという問題について、異なる時代や哲学者を専門とする研究者たちが集い検討を行う。概念形成の哲学的理論にかんする代表的著作として、カッシーラーの『実体概念と関数概念』が挙げられる。本 WS のもう一つの目的は、そこで議論のアップデートを図ることにもある。カッシーラーが伝統的理論として一括して扱ったものを、本 WS では、より個別的・具体的な観点から再検討することになるだろう。

まず、酒井が問題の起源である古代ギリシア哲学の観点から、アリストテレスの抽象という手法は彼の知識論の基礎たりえるのかを問題とする。アリストテレスにとって「抽象」(aphairesis, aphairein)とは、対象 X の何らかの側面に焦点を当て、その側面以外の残余物を無視するものだと一般に要約される。このように抽象を捉えるとき、『分析論後書』における「帰納」(epagoge)が連想されるだろう。「帰納」の過程においても、帰納される対象以外の諸々の特徴が捨象される。もし、抽象と帰納の外延がある程度一致するならば、抽象は彼の知識論にとっても扇の要ということになるだろう。ただし、アリストテレスの抽象概念に対しては、カッシーラーなどによる批判も存在する。そのような批判の妥当性を測るには、アリストテレスによる数学的对象の取り扱いが問題となる。そこで本発表では、アリストテレス哲学における抽象と数学的对象の関係を考察することで、彼の知識論を間接的に救うことを目指す。

続いて、アダム・タカハシが中世哲学における「抽象」の理論の展開を論じる。アリストテレス的な「抽象」(abstractio)の理論にかんして、中世においてもっとも知られるのは、トマス・アクィナスが展開した「可知的形象」(species intelligibilis)を媒介とする考えであろう。ただし、トマスの議論は直後からガンのヘンリクスやオッカムのウィリアムによって批判された。アヴェロエスもまた、抽象の理論自体は重視しつつも、トマスとは異なるアプローチをとっていた。このようにトマスが抽象知とその成立の条件として考えていたものが、他の哲学者・神学者たちによって標準的な教説とは必ずしも考えられていなかったことは注目に値する。そこで本発表では、近年の中世認識論の研究成果を踏まえたうえで、アヴェロエス、ガンのヘンリクス、オッカムのそれぞれの認識論における抽象の取り扱いを、トマスのそれと対比させたいと整理する。

近代哲学の観点からは、五十嵐と浅野が「抽象と概念構造」をテーマに発表する。とりわけ、様々な抽象の理論の基礎となる概念構造の問題に焦点を当てる。抽象の理論は一般に、概念の構造について次の2点を前提とする。(1) 概念は一般に、より単純な概念の連言的結合によって構成されている。(2) 概念間の上下関係は、部分全体関係によって規定される。このような前提に基づく概念構造の考察は、ライブニッツ=ヴォルフ学派によって詳細に体系化された。対して、カントおよびロツツェは、上述した二つの前提にかんして独自の観点から批判を与えた。本発表では、カントおよびロツツェによる批判を両者の連関も含めて検討することで、抽象の理論の内実と限界を明らかにする。

最後に、Jimmy Aames が、パースにおける二種の「抽象」の区別を取り上げる。一つは最初期の著作、「新しいカテゴリー表について」で導入される「前切」(precision)の操作である。それは、ある要素に注意し、別の要素を無視することで生じる概念分離であり、パースのカテゴリーの導出において重要な役割を果たす。もう一つは、「実体化的抽象」(hypostatic abstraction)と呼ばれる操作である。それは、例えば「蜂蜜は甘い」を「蜂蜜には甘さがある」に変換する操作のように、それを通して私たちが思考する記号(「甘い」)を、それについて私たちが思考する記号(「甘さ」)に変換する操作である。そこで本発表では、パースに即してこれら二種類の抽象を解説し、両者の関係についてとりわけ「概念形成」の観点から考察する。